
ピエロ

ゆぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピエロ

【Nコード】

N8836D

【作者名】

ゆぽ

【あらすじ】

ピエロに関わり人が群がる。それは現実世界にあるはずのない現実であり、真実はそこに隠されていた。

1 ピエロの指は枯れた白を切り取る

いつからだったかは忘れたが、私はピエロの家に通っている。

ピエロというのは道化師のことではなく、私がその住人をそう呼んでいるだけ。

そして私はいつもの帰り道、赤いランドセルを背負ったまま、少し開いた門を擦り抜ける。

家と呼ぶには大きく、屋敷と呼ぶには小さい。

バロツクの時代を思わせるような装飾がされた家の周りは、広い庭。様々な木や花が綺麗に植わっている。

そして、庭を見渡しながら歩いていた私は、白い薔薇が植えられた一角に彼の姿を見つけた。

「今日は薔薇の手入れをしてるの？」

「うん。ちょっと待って、もう少しで終わるから」

彼は言って、枯れた花を摘んでいく。

私は聞いて、詰まった花をじっと見る。

下に落ちたものすべて、同じような長さの茎がついており、ピエロの几帳面な性格を垣間見ることができる。

そんな彼は切れ長の目をしている。今はその目を伏せ、手元の鋏と花を見ている。

その瞳の色は、月を連想させるような左目、太陽を連想させるよ

うな右目。つまり、オッドアイだ。

色合いはアンバランスではあるものの、その一部が彼の長めの黒髪に隠れる。そのため、その姿は精巧に作られた人形のように見える。

やっぱり綺麗だな、なんて思いつつ、私は男にしてはかなり細身の彼を待つ。

いつの間にか、摘まれた薔薇の花弁が存在していることも忘れ、彼の観察に熱中していた。

「おわったよ、待たせてしまったね」

ふう、と一息ついて、ピエロは振り返る。

さらさらと彼の長めの黒髪が舞う。

「そんなに待ってない」

私はつぶやくように言って、彼の手を見る。

いつも黒い爪は、形が整っている。マニキュアでも塗っているのだろう。

「今日はいい紅茶が手に入ったんだ」

彼は目を伏せて手に握る使い古された鍔を見つめる。

「さあ、中に入ろうか」

「わかった」

私は彼についていく。

空に浮かぶ太陽は、まだ高いところにある。

時間は、まだまだたくさんある。

2 美しい子供の指は白と黒を叩く

ピエロは私を奥まで連れていった。

かちやり、と扉が開く。

「ここで待つて」

彼はそう言い、私を置いて行く。

やはり、ここは彼のためにある場所なのだと、改めて実感する。

部屋は外からの日光が入って来るので、明るい。部屋の家具は全体的に暗い色のものが多く、実際は暗く感じるが、慣れてしまえばたいして変わらない。

そして、この部屋の中央にはテーブルがある。

明るい色の木に、深い紅のテーブルクロスがかかっていた。

ほかに、ピアノも置いてあり、油絵の画材も置いてあった。本棚には、どこかの国の言語で書かれた本もある。

そして私は、いつものようにピアノの鍵盤に触れる。

ドミソの和音を鳴らす。

そして弾けそうな曲を思い出しながら、私は指を動かす。

ショパンの幻想即興曲なんて弾きたかったわけじゃないけれど。

私は頭に浮かんだそれを弾いていた。

曲が終わって鍵盤から指をはなすと、パチパチという一人分の拍手があった。ピエロだ。

「美子はやっぱり上手いねえ」

彼は口元だけに薄笑いを浮かべ、一定のテンポで手を叩く。

「さあ、紅茶が入ったよ」

ピエロはテーブルにカップを置き、ついで、といった感じでイチゴのショートケーキも並べる。

そして彼は椅子に座ってカップを口に付ける。

「早っ」

小さくつぶやくと、目を閉じていた彼は朱色の右目を開け、私を見る。

「今日はちよつと失敗したから、毒味」

毒なんて入れた覚えがないのなら入っていないだろうに、と私は心の中で突っ込みを入れる。

そして、私もまた、ピエロの座る向かい側の椅子に座る。

それから、私とピエロは他愛のない話を繰り返した。

テレビで面白い漫才をやっていたとか、面白いドラマをしていたとか。

学校では誰とも話さないものだから、話が尽きることはなかった。

「そろそろ帰ったほうがいい」

彼にそう言われて見ると、空は真っ赤に染まっていた。

時計を見ると、六時前だった。

「闇は、美子を奪いに来るから、早く」

本当は帰りたくなどなかったけれど、私は帰ることにした。ピエロの目が細められ、声のトーンが下がったのがわかったからだ。

「じゃあ、帰るね。また」

「また、ね。美子」

広い庭を駆け抜けけると、そこは寂れた住宅街の、黄昏だ。

「一人は、嫌。けれども慣れたの」
家には両親も、祖父母も、誰もいない。

3 ひとりの朝と夜を過ごす少女

「ただいま」

返事が来るわけでもないのに、私は家の中の闇へ声をかける。いつもこの時が一番孤独を感じる。

そして私はリビングへと向かい、ダイニングテーブルの上にランドセルを荒く置き、冷蔵庫の中を見る。

「今日もだねえ」

呟いて、私は鍋に水を入れ、火にかけた。軽く塩も入れる。

それから、テレビの電源をつけ、水が沸騰するまで待つ。

あとは、パスタの麺を入れて、茹でるだけ。

適当にあった野菜でサラダも作り、茹であがった麺にレトルトのミートソースをかけて、テーブルへ持っていく。

テレビでは、隣町で強盗事件があったことを生放送で伝えていた。犯人は目撃者を次々と射殺していったらしい。物騒な話だ。

「明日、学校休みかな」

不安と喜びとが押し寄せる中、私はパスタの最後の一口を食べた。

そして、いつものようにシャワーを浴びて、いつものようにテレビのニュースをつけたまま、パソコンを起動する。

ずいぶん前の型のため、少し時間がかかる。

「犯人は、老夫婦の自宅を立て続けに襲い、逃走の際、目撃者を射殺しました。現在犯人は、旧第一小学校の廃校舎に潜伏している模様です ……」

十時前になっても、同じ内容を繰り返していた。

パソコンの起動が終わると、私はインターネットを立ち上げる。そして、検索ボックスに「ピエロ」と入力する。出てきた結果から、赤く色がついた、前に開いたことのあるページを再び開き、中のコンテンツを見ていく。

私は調べていた。

ピエロは、私が「ピエロみたいだね」といったその時に、「その通りだよ」と言ったのだ。

それは、昔から彼がピエロだったということ。

彼は派手な化粧こそしてはいないが、ピエロなのだ。

「ああ……」

眠い。

気がつくと朝だった。

私は省電力モードになっているパソコンの画面を見て、そしてテレビを見た。

画面の左上の時計は、六時五十分だった。

「眠いなあ」

私は呟き、あくびをした。

しばらくぼーっと朝のニュースを見ていて、そして七時の少し前に、かすかにノイズが聞こえた。

そのノイズはだんだんと大きさを増し、テレビの時計が七時を指したとき、放送が入った。

『昨日起きました強盗事件の犯人がこの町内に潜伏している可能性があるため、学校は休みになりました。なお、外出も控えるようにしてください』

嬉しいような、悲しいような気分だった。

4 宅配業者は空気を読まずに街を歩く

暇だ。

何度繰り返しただろう、この言葉。

もちろん、ひとりの室内　ひとりの家でそんなことを何回も呟いていては少し変人の部類に入ってしまうが。

「あー、暇だ」

学校が休みになったものの、私は最新のゲーム機などという暇つぶしのものはあまり持っていない。

だから、パソコンを使って遊んでいた。ゲームなどを見ていたが、もう遊んでいないものは私の嫌いなアクション系のゲームだけ。

ネタが尽きてしまった。

便利なようで、実は不便なのだろう。私はこのインターネットというものをそう思うようになった。

「暇だ」

本日、百回以上つぶやいた言葉をまた、私は繰り返す。

テレビはつけっぱなしにしてあるが、平日の昼前など、何も面白い番組はない。

だから、どこかの化粧の濃いおばさんが喋っている番組をつけっぱなしだ。

実のところ、主婦の疲れた話など聞きたくない。けれど、他のテレビ局の番組では、嫉妬や妬みなどといった、ドロドロとしたものがテーマのドラマをしていた。

『賢治さんは私のものよ!』なんていうドラマは見たくもない。仕方なく、これが一番まとまったのだ。

テレビを消すこともできたが、音がないとさみしい。

独りだということを、ひしひしと感ずることが出来る気がしたからだ。

「暇だなあ」

そして、本日何回目とも知れぬ言葉を私は口にするのだった。

ピン、ポーン

突然、家の呼び鈴が鳴った。

「宅配です」

軽い感じの男の声がした。けれど、私は無視する。

「あのー、お留守ですかー？ お留守でしたら返事をお願いしますー」

留守だったら返事は来ないだろう。などとひとりで突っ込みながら、私は検索ボックスに文字を打ち込んでいく。

ピン、ポーン

「お留守ですかー？」

間延びした声だが、安心感を得られなかった。

私は臆病者だ。昨日の事件を鼻で笑っておいて、ひとりで震えている。

だから、私はすくつと立ち上がり、カーテンを閉めた。リビングにいれば、大体のことはできる。

「暇……か？」

そして、私は自問自答を始めてしまった。

それもすぐに終わる。

ひとり、私はいる。

5 記号化された文字列を読み上げる背後で

「やあ、美子」

ふと、小説を読むのに熱中していた私の耳が、ピエロの声を拾った。

「ん？」

一時的に読むのを止め、右へ左へ、首を動かす。だが、誰もいない。

その時には、私は自分以外に動くものを見つけることが出来なかった。

「……空耳か」

軽く、自分を納得させるために呟く。そして私はまた、画面の中の文字列に集中した。

「……まったく」

空耳などではなく、ピエロの声が間近から聞こえたとき、私は勢いよく真後ろを振り返った。

「おお、気付いた」

「なんでいるの!？」

即座に思いついた疑問を、驚きの言葉より先に投げつける。

すると彼は少し悩んで、「家にいるはずなのに、荷物受け取ってくれないから?」と、疑問符付きで返してきた。

「荷物って……宅配のバイトでもしてるの?」

「うん」

「で、どうやって入ってきたの」

「その窓が開いてたから」

彼はそう言っ、カーテンのかかった、庭に続く窓を指さす。

その窓の鍵は、かけっぱなしにしているつもりだ。カーテンを閉めた時に、しっかりと閉まっていたのは、思い違いだったのだろう

か、それとも。

「……それで、美子。“ミナガイユリエ”からの荷物、中身はたぶん毒入りストロベリーパイ」

ピエロは口の端を歪め、手持ちの荷物を私に差し出した。

ピザの箱、というべきだろうか。ピザの箱を2つほど重ねた厚みはある、大きめの箱だった。

「毒入りストロベリーパイが入ってるってわかってるなら、届けなければいいじゃない」

私は立ち上がり、荷物を突き返す。

するとピエロはふっと笑い、また荷物を渡してくる。

「どうぞ、これは美子のもの」

もう諦めるしかなかった。

私は荒く荷物を受け取ると、ダイニングテーブルまで運ぶ。そして、音がするほど強く置き、ピエロを見る。

「では、これで。外は黒服の白がうるついでるからね、出てはならないよ」一言、彼は釘を刺して玄関から去って行った。

その後、中身はゴミ袋に入った。

彼が言ったように、中身はストロベリーパイだった。毒入りかまでは調べられなかったが、送り主の名前“ミナガイユリエ”は確かに私に何度も危害を加えてきた、社長令嬢の名前だった。

6、一人が独りの心を読み上げる

私は教室に入る。

騒がしかった室内は、一瞬にして静まり返った。

「来たよ、アイツ」

私の近くで、彼女らは私を指差し笑う。

「今日も地味だなあ、あいつって」

男たちも笑う。

六年二組のクラス中が、ある種の笑いに包まれた。

「バカみたい。ひとりでもできないくせに」

呟いて、私はクラスの真ん中近くにある自分の机に向かった。

地味だ地味だと言われても、私には服を買いに行く余裕はない。

しかし、彼らをうらやましく思うことも無い。

別にいいんだ、と言い聞かせる。

「はいー、席についてくださいー」

担任の先生が入ってきて、この雰囲気は一瞬にして消える。

先生は、新人だった。時々ドジもするし、何より雰囲気が普通のクラスと違うことに気付かない。

そして、先生は言うのだった。

「このクラスの団結力はすごいですね。だから、来月の校内合唱コンテストも、みんなで頑張っていきましょう！」

「やあ、美子」

私はピエロの家に行った。とくに用事などはなかったが、誰かのそばにいないと、自分が抑えられなくなる気がしてたまらなかった。

そして、この間の部屋で今日の話を彼にすると、ピエロは言ったのだった。

「その先生さんは、この先苦勞するよ。たとえば、車に撥ねられて傘が足に刺さるとか」

彼は口角を引き上げ、私の反応を楽しむように言った。数秒様子を見ると、どうやら冗談を言ったようだ。

「たまにぞっとするようなこと言うよね、ピエロは」

「そう、そんなに怖かったかな」

「うん」

彼は難しそうな表情をして、部屋を出て、ドアを閉めて行く。

「お茶を入れてくるよ」

そして、室内で私はひとりになった。

ひとり、というのは私の嫌いな言葉だ。

表記の違いで、数をあらわすだけであったり、孤独をあらわすものであったり。ややこしいものは嫌いだ。

もちろん、この言葉は私を指し示すのにも楽な言葉だ。

学校の職員室に入っても、「あの子誰?」「ああ、六の二の、いつもひとりでいる子だよ」という会話が繰り広げられていたりする。

けれど、それはもう慣れてしまったことだから、べつにいいんだ。言い聞かせて、自己暗示をかけている私は、滑稽だ。

自称気味に笑っていると、カチャリとドアが開く音がした。

「待たせてしまったね」

ピエロは一瞬あたりを見回して、目を細めて、それから私の前にカップを置いた。

7 白猫は赤い瞳で世界を視る

ピシッ

窓枠の軋む音がする、気がした。

今は藍色の夕暮れ時。ピエロの瞳の色の存在がどちらも希薄になるような、太陽と月がどちらも勢力を弱めるような、時間。

「こっちに。窓にアリスが来ている」

入口付近にいたピエロに呼ばれ、私は立ち上がる。

「何？ アリスって、童話？」

彼のほうへ歩きながら私は言って、その直後だった。

ピエロは私の目を背後から右手でふさぎ、左手で引き寄せた。

そして、窓が割れた。

「なーんだ、やっぱりアンタにはお見通しってわけね？」

「ん？ 何のことかな、お嬢さん」

暗闇の中、すぐ近くでピエロの声がする。

「あたしはアリスって呼ばれてるんだけど？ あんたもこの名は知ってるはず」

「では、アリス。今すぐここから立ち去ってもらえるかい？ ここは君のようなものが立ち入っていいところではないんだよ」

話の相手は、アリスという名の女性のようだ。年齢は、私くらいだろうか。

会話の意味がよくわからないが、この女性が住居侵入罪に問われることもあるだろう、という考えが浮かんだ。

しかし、それにしても二人とも冷静に言い争っている。理由はわからないが、ピエロにはアリスという人物が入ってきたことがわかったようだ。となると、よもや私には手の出せない領域の話だということとは想像がつく。

けれど、普通の女性ならば目をふさぐ必要などないはずだ。ピエ

口の行動は、変なところで予想できず、その後に考えを巡らせても答えが出ない。

「あたしのようなものってことは、アンタもよね。異形だったでしょう」

「昔の話を出さないでもらえるかな。今は彼女に名を与えられて生きていくからね」

彼女、というのは私のことだろう。名前を与えたというのはピエロと呼ぶ、このことなのだろうか。そうだろう。

しかし、それよりもっと先に引かかった「異形」という単語。

「訂正。アンタは今も異形だ」

ふと、私の目をふさいでいたピエロの右手の力が弱まり、視界が解放された。眩しい。

「君は外見からして異形だろう」

ピエロはその手の平を天井に向け、おどけたように言った。

ある程度くつきり見えるようになって、私は彼から視線を外し、アリスという女性の姿を探した。

そして、ピエロの目線の先に、見た。

人とは思えないような雰囲気を感じ、白いワンピースに身を包んだ、肌も透き通るように白い、どこまでも白い少女だった。目と唇だけが赤く、目立つ。

その目を見ると、猫を連想させるような瞳だった。瞳孔が細い。

そして、右手は指が六本。左手は四本で、爪が赤い。

「あら、こんにちは。あたしはアリスよ。」

彼女は細い唇を笑みの形に引き上げ、クスッと笑った。同時に両手を後ろに隠している。

「この子の顔が見られただけでもよかったわ。今日のところは引き上げましょう」

彼女はそう残し、入ってきた窓から飛び降りていった。

地面に降り立った音は、聞こえない。

8 黒い世界と公園と白

またもやひとりの私。

ただ夜が好きだけで、外に出ている今は、人々が眠りの支度をする時間。

私は一人、公園のブランコに座って星を見ていた。

この公園は不思議だ。見た目が小さい割に広く、遊具もたくさんある。昼は子供、夜は大人でにぎわう公園。

別名、柊の公園。

その名の通り、公園の周囲には柊の木が植えられている。

「空は色を変え、私の心模様は変わらずに……」

ある詩人の書いたものを、ブランコの上でつぶやく。

周りにはだれもない。今日はたまたま誰もいないのだろう。いつもは数人の先客がいる。

「うつりゆく世界が、私を置いて行つて……」

はるか遠くに夢を見る。

私は自嘲気味に笑って、立ち上がる。

錆びた金属同士のこすれる音がして、風があたりの木々を揺らした。

そして、深く息を吸って、吐いた。

世界は私がいてもいなくても関係ないんだね。

その言葉を心の内に秘めたまま、私は公園の出口に歩を進める。

「帽子屋はあの子供が読める？ ちょっと空っぽなのよ」

「ああ。『ちゃんとした人間』なんだから、そんなに諦めることはないんだがね、彼女は」

聞こえてきた会話は、なぜか少し異質だった。
例えるなら、そう　自分がピエロと話しているような、そんな
感じ。

それは私の後ろから聞こえた。

それと同時に、どこかで聞いたことのある声だと感じる。

振り返ると、いつの間にかブランコに座っている二人の男女。

「おや、あまり特定できる言い方はしないほうがよかったようだよ、
アリス」

男のほうがあった。

黒いシルクハットをかぶっている青い瞳の少年は、先ほど帽子屋
と呼ばれていた。

女のほうは、にっこり笑って、私の目を見る。この間ピエロの家
に来た、アリスだった。

「久しぶり、というべきかな。アレは元気かい？」

アリスは今日も、白かった。

「行ったほうがいいわ、ここにいると確実に死ぬからね」

「ああ、君はまだだ」

彼らが言って、私は息を吐いた。

「……まだって、何が」

呟いた言葉は夜の闇に溶け、空気を震わせた。

異様なまでに静まり返った公園。

風が木々を揺らすことはなく、ただ静寂だけがある。

「さあ……行け」

「そしてあたしたちの目の前から消えて頂戴」

数秒、何にも焦点が合わなくなった。

そして、気がつけば家の前に立っていた。

9 影の闇は白を飲み込む

そこにあるのに、気付かないうちに消えてしまつもの、そして運^{だめ}命。

植木の陰から出てきた影はアリスを眺め、嗤う。

「いつまでやる気だ？ 俺はお前の相手をする時間が惜しいんだがな」

「……あたしがアンタに勝つまで、アンタの時間を使ってあげるわよ！」

影は白いTシャツに緑のパーカーを羽織っていた。肩のあたりで切りそろえられた黒髪がさらりと揺れる。

ただそれだけなのに、死人の顔に宿る微笑は、体が動かなくなるほどの威圧感。蛇に睨まれたような恐怖。

大仰なことは言ってみたものの、今日この時のアリスには勝算がなかった。

これで何度目とも知れぬ挑戦は、すべてアリスから持ちかけていた。

「不死身だとかなあ？ “死ね”というより、“消えろ”と言うしかないじゃないか。面倒臭い」

未だかつて、アリスは彼に勝ったことはない。

影は本当に面倒くさそうな顔をして、左手をアリスのほうへ伸ばした。

「……アリス、やっぱり君にアレは無理だよ」

帽子屋が彼女をなだめるが、彼の努力はむなしく、彼女はずっと、陰の漆黒の瞳を睨んでいた。

数秒の沈黙。

先に切り出したのは、アリスからだった。

「……夜よ、我の手に闇を」

「アリス、その影の闇へ」

これまでの闘争は、手加減していただけなのだろう。

影は一瞬でその左手に闇を宿し、アリスの足元に闇の世界を呼び込んだ。

「俺は手加減するのに疲れたんだよ」

「っ……！」

影の右手が“バイバイ”の形に振られ、アリスは闇に落ちていった。

残るは、シルクハットの帽子屋のみ。

「お前じゃあ、時間を割いてやるほどの価値は無いな」

影が闇を宿した瞳で帽子屋を見定める。

それは実際当たっていて、帽子屋はアリスにさえ勝てなかった過去を持っていた。

「やはり、お前は賢いな。無駄なプライドも持っていない」

「俺はアリスに馬鹿だと何度も言われる。おまえはそれだけ低レベルなだけだ」

言い捨てて、帽子屋はすう、と息を吸った。

「外へ」

公園は、影を残している。

切れかけの電灯がちらついている。

現実から切り離された空間に、影はまだ佇んでいた。

「あの子供は、お前なんかには渡しはしないさ」

まだ、現実^{じやうじつ}に眞実^{しんじつ}を持ち出してはいけない。

10 青い瞳の半分、そして半分

泣いている。

夜中に目が覚めた。

私は夢を見ていたのだろう。肌の表面は汗で湿り、目から涙の痕が伝っていた。

「泣いてるの、この私が？」

ベッドの上で一人つぶやき、言葉は闇に吸い込まれた。

『眠れ、少女』

そして私は眠りについた。

気がつけば朝、夢の内容は忘れてしまっていた。

「いつまでいるの、アイツって」

「いいかげんに消えてほしいよね」

「てか、死ねって感じ」

同級生の言葉、机の上に置かれた猫の死骸。

まだ瞼が上がった状態で、白い毛に映える赤の瞳。背中に茶色く変色した血。

どこことなく、アリスに似ていた。

私はその猫の頭に触れ、尻尾のほうまで手を滑らせる。

「触ったよ、アイツ」

「うわ、汚い奴」

笑い声が充満する。

「この猫より死ぬ価値ないんじゃない、君たちってさ」

聞き覚えのない声だった。皆の視線が一点に集まる。

「……誰？」

そう言ったのは、他ならぬ私自身。

「僕？ 適当に呼んでよ、名前は纒愁かすらしゅうだから」

簡単な自己紹介をした彼は、私を見ている。

一見するとどこにでもいそうな小学生なのだが、よく見ると何かが違う。

足もとから見ると、普通のジーンズにTシャツを着て、軽く上着を羽織っている。ただそれだけで、あまり変わりはない。

顔は少し大人しそうな顔つきで、整っている。そして一重の瞼があり、その奥に見える瞳。

青い瞳だった。

「……ハーフなの？」

「いや、クォーターだってさ。うちの祖母がハーフだよ」

「へえ、そうなんだ」

静まり返ったままの教室。

「あ、そっか。転校生！」

名前も忘れたクラスメイトが言った。転校生は普通担任に連れられてくるものではないのかと思ったが、偏見なのだろうか。ドラマの見すぎか。

「ちょっと、愁くん待ちなさいよ、まだ話が終わってないでしょう」担任が入ってきた。皆の表情と空気が和らぎ、私と愁の表情は硬

くなつた。

そして、転校生として彼は言った。

「話ですか？ どうせ長い注意と要らない気遣いですよね。必要ありませんから」

彼は軽く言つて、そして担任は苦笑した。

「そう、もうみんなとも仲良くなれたみたいだし、よしとしましう」

「助かります。……ところで、この学校で死んだ動物つてどこに埋めます？」

この猫のことを案じているのだろう。彼はちらりとこちらを見る。「猫の、死骸？ 何で美子さんの机の上にあるの？」

言うか言うまいか。

これは朝来たら置かれていて、それを取ってきたのはおそらくそこに立っている女三人。

言えば確実に嘘だと言われ、彼女たちは勝つ。

私がこの人たちに勝つなど不可能、まったくの可能性を持たない。

「……あの、」

「彼女は取ってきてませんよ、そこにいる女子たちが拾ってきたようですよ、柊の公園から」

私が言おうとしたその時、愁はつらつらと言葉を並べた。

なんで私を庇うのかとか、それ以前に私は心臓が止まる思いだった。今は何とか抑えているこの心臓。

柊の公園から、という固有名詞。

アリス

アリスとその連れ“帽子屋”。

「何でわかったの？」

と、先生。

「コイツがとってきたんじゃないの？」

「そうよ、私たち見たよね」

「うん、絶対に見た」

「帽子屋……さん」

ざわつく室内で、私がつぶやく言葉は誰にも聞き届けられることなく、溶ける。

11 ひとつの想いとふたりの架空

一文、例題。

花子さんが太郎くんの首をナイフで切り裂けば、どうなるでしょうか。

私はふと、グロテスクなことを想像してしまった。

今は放課後で、それなのに私は帰り道とは逆方向へ歩いている。

「どこ行くの」

私の目の前にいる転校生に右手を引つ張られながら質問すれば、

「知る必要はない」

同じ答えばかりが帰ってくるのだった。

いつでもどこでも、誰かに引かれてばかりいる私。

いいかげんに、自分でも行動しないとけない。けれども、することがない。

だから、ついていくしかない。

第一印象から、彼はあまりランドセルは似合いそうになかったが、これ以上なくしつくりきている。

不思議だ。

けれども今、私はそんなのどうでもよかった。

刻一刻と時は通り抜け、野良猫の長い鳴き声とカラスの短い声が混在する夕刻へ。

歩くうちにどんどん見知らぬ地へと来た感じがした。

何分歩いただろうか。どれだけの距離を歩いたのだろうか。

実際はそんなに歩いていないのかもしれない。けれども、なぜか

無駄に疲れる。

「さて、ここでネタばらしといこうかな」

昨日の“帽子屋”の表情かおをして、蘊愁かすねしづは振り返った。

黒いランドセルが今の彼には全く釣り合わない。先ほどまでは、彼のために作られたようだったランドセルが。

「……やっぱりね」

アリスの陰にいる者。

「君は、アレについて何を知っている？」

「アレ？」

代名詞で言われてもわかるわけない。そういう目線を彼に送り、頭の中ではピエロのことだろうと理解する。

まったく知らない、というわけではない。けれども、知っているのは表面的なことだけ。

それを知らない彼は、敵か味方か。

私自身、そんなの実際はどうでもいいが。

「へえ？　じゃ、要件はもう済んだよ」

突然、目の前で帽子屋が言った。

「君は使えそうで使えないんだねえ」

彼が言って、そしてまた私の手は掴まれた。

そのまま、引かれていく。

「家まで送る」

「結構」

「今どこにいるかさえわからないくせにね」

彼は私を引きずって歩いて行く。

「……そんなの、わかりきってる」

私は彼に聞こえないように、そっと零した。

いつものように自嘲気味に笑って、私は彼に連れられ、家路につく。

「柊の公園まででいいか？」

前にいる帽子屋が聞いてきて、私は軽く首を縦に振った。

見覚えのある背中を見つけたのはその時。

長い白髪が風に揺れ、透き通るように白い肌と純白のワンピース。それが誰と判断するのに、そう時間はかからなかった。

私の手を握っていた帽子屋はその手を放し、アリスの元へと駆けていった。

12 鮮血は白を染める染料になる（前書き）

血とか、苦手な人がちよつといそうなものになっています。
読み飛ばしても、そう大きいダメージにはならないかと。

12 鮮血は白を染める染料になる

一文、回答。

花子さんの首から生温かい血液が垂れ流され、返り血を太郎くんが浴びます。

それは夕刻、白いアリスが赤いアリスに変貌する時。

「……アリス！」

私の腕を持っていた帽子屋が、離れていく。柊の公園のブランコの傍に佇む白い背中に向かって。

帽子屋という名称、帽子をかぶっていない帽子屋だが、アリスはアリスだった。

一陣の風が通り抜け、砂場の砂を巻き上げる。

「無事だったんだ、ね」

私は遠くから二人を眺めていた。

帽子屋は言いながら、アリスの肩に手をかけた。

瞬間、鮮血。

アリスは振り向きながら、銀のナイフで帽子屋の首を掻き切った。パツカリと割れた傷口から溢れる血液は地面をその色に染めて。

「昔、教えたはずなのに。こういうときは注意しなさいって」

彼女は笑っていた。なんとも形容しがたい、不気味な表情で。

そして、鉈を使うように右手のナイフを振り上げ、帽子屋の首の骨を断つ。

髪を持ち、アリスはそれを目の前まで持っていく。

胴体は下で、首は上で。
離れている。

まだ出ている血で、アリスのワンピースは、その白いワンピースは、赤に染まった。

「次は君？ でもおもしろくなさそうだね」

私のほうを向いて、彼女は言った。恐怖で足が動かない。

けれど、彼女の赤い眼を見て、違和感を覚えた。私を見ていない。

「……いつ振りだろうね、アリス」

背後から声。同時に左手が握られる。

「でも、君はアリスなのかな。白いのがアリスだと思っていたんだがね」

いつものピエロの語り口。それでいて私は違和感を感じている。

何かが違う。そう思うだけ。

何も感じることはできないし、私の背後に立つその気配はピエロなんだろう。けれども、何かがおかしい。それは、たとえばオレンジジュースなのにトマトジュースの味がするような。

「あたしがこれをするのは踏み込まれた時。アンタの場合、距離があって面白くないわ」

地面に打ち捨てられたランドセルと胴体。

首はなく、それは冷たく。

「さて、では彼女は連れていくよ」

一瞬の瞬きの後、私は自室のベッドで朝を迎えた。

13 空白と計算の二千三百二十一

人が一人いなくなった。

というのは、昨日の^{かたじけなく}縊愁のことだ。

たいてい人が死んだりいなくなったりすればテレビなどで取り上げられると思っていたが、実際は違うようだ。

私は朝食の食パンをかじりながらテレビのニュースを見ている。

幻想かと思うほど、昨日の記憶は私に焼きついていない。

だから確認をしようとテレビをつけ、結論。「何も変わっていることはない」

いや、「何も変わることはなかった」のだろうか。どちらにしても、私の苦手な分野の話だ。

殺人事件で、首がない異質なものだろうが、小さな町故、報道されないのだろう。

私はひとり片付け、パンの耳を口に入れる。

「今日も平和な一日がやってきました！ では、健康観察をします」
教室で朝の会。いつもの言葉の後、緑色のカードを持って先生は名前を呼ぶ。

出席番号順に、1番の^{あおい みずき}蒼井美月から、最後の^{わかや けいすけ}若谷慶介まで。

「^{かしい}柏井さん」

「^ああい、元気です」

「^{かちき}勝木くん」

「はい、元気です」

転校生ということで、縊愁という少年はまだ名簿に載っていないか

ったのだろうか。

そう思ってしまうほどあっけなく、彼の名前があるはずの場所は飛ばされて。

「若谷くん」

「はい、元気です」

最後までいって、先生は教室を見渡してつぶやく。

「欠席はいませんね。みんな元気だなによりです」

ぽっかりと空いた後ろの端にある席。昨日運ばれてきたものなのに、それはずっと前からあったような自然さでそこに居座っていた。

知っているのは私だけなのか。

授業中でも考えることは違和感と存在無視の理由。

無視、というのは言い方が悪いが、実際に存在していたものなのに、いなくなっているそのことだ。

「……さん、美子さん」

「あ、はい」

考え事をしているうちに指名されたようだ。含み笑いの声が聞こえる。

「こここの問題の答えは？」

黒板に書かれた問題は、小学生にしてはややこしい計算問題。

五桁の引き算、二桁の掛け算、割り算。括弧で括られたところもあり、面倒くさい。

「早くしろよー」

「こんなの簡単でしょー」

笑い声が大きくなる。

私は黒板だけを見つめ、ノートもなにも開かずに答える。

「……二千三百二十一」

「正解」

空気が凍りついた。

「何アイツ。頭どうかしてるんじゃないか」

「ムカつく」

聞こえる声に私は全く反応せず、それらを無視してまた自分の世界に入る。

14 太陽映える大空へ舞い上がる燕

私は毎晩公園に行く。

最近、柊の公園に行かなくなった。アリスのいたあの公園には近寄りたくなかった。

ひゅう、と生暖かい梅雨時の風が通り過ぎる中、私はブランコに座って公園を眺める。

ここは、広い。

柊の公園とは対照的に、明らかに“造られた”もの。植わっている木も等間隔に。影を持たない、夜も眩しい公園。

遊具も、規定に沿って作られた真新しいものばかり。こういうものは古くなるにつれて汚く錆びていくものだ。

「さて……」

今の時刻は八時二十分。

そろそろ時間も遅いので、家に帰ることとする。

ひとりで歩いて、出る時に、この公園の名前を見つけた。

大きな公園の割に、こじんまりとしたものに彫られていた名称。

たいようの公園

ありきたりだとも思った。同じ名前の公園が何千とあるだろう。しかし、太陽の日差しが当たっているように明るい公園の中は、その名を冠するにはちょうどいい。

私はそんなことを考えながら、ゆっくりと歩く。何度か交差点で曲がり、広い一本道を見つめる。

ぽつぽつと歩いて行く。

昼は忘れて夜を歩こう。

ああ、月はどこにいろの。

ひとりには悲しいかい、寂しいかい。

「ねえ君」

左肩に男の右手。淡く漂う林檎の香り。

「君が、美子」

少しかすれた低い声。驚きと喜びを含んだ言葉。

その手を振り払い、振り返ると、この近所にある高校の制服を着た男が立っていた。吸い込まれそうなほど黒い瞳を持った彼は、じつと私を見ていた。

茶色に染めた髪、三白眼の気のある目、抜けるような白い肌、だらりと下げた両手。さらには両耳につけた銀のピアス。

私にはこんな知り合いはいないはずだ。遠い親戚であっても、同級生の兄であろうとも。

「……誰？」

素朴な疑問だった。この人は見たことがない。だから、何者か。すると、薄い唇が左右に引かれ、そして言葉を紡いだ。

「僕は君のもの。君の知らないところにいた、君のための存在」

滑らかに彼は言う。

喋り慣れているというように、少し飽きたような色も含まれていた。

私はそれに少しの苛立ちを感じ、意識的に冷たい声を出して訊ねる。

「だから、何者なの」

訊くと、彼は笑った。愉快そうだ。

「……仕方ないか」

彼は呆れたように言つて、そして真剣な目で私を見た。

「星城高校二年四組、藤乃蓮^{ふじのれん}。これは偽名でもあるけど」

そして本当に一瞬だけ、蓮とか言う彼の顔つきが変わつて、そしてまだ続ける。

「僕のことを正確に表す言葉はない。前に会った人は僕を“燕^{ツバメ}”と呼んだけれどね」

その晩、彼は私の家にズカズカと入ってきた。

15 燕が我が家に巣を創るその日

「何で入ってくるの？」

私は今家にいる。今日は一人ではなく、二人だ。

そして、久しぶりにリビングのソファに座っていた。机をはさんで向い合せに置かれた白と黒の合皮で張られたソファの黒側に座っていた。この場所に座るのは、ひよっとしたら一年ぶりかもしれない。

白いソファには、先程会った藤乃という男が足を組んで座っている。

そう言えば、星城高校の制服は変わっている。ブレザーで、色は黒。ズボンも黒。ネクタイは赤。伝統校だと聞いているのだが、その制服のデザインは現代風だ。

「いいじゃないか、僕は君のことを気に入ってるんだから」

彼は組んでいた足を解き、薄笑いを浮かべた。ふと、その瞳が綺麗だと思ったのはなぜだろうか。

しかし、今はそんなことを考えている場合ではない。

部屋は有り余っているが、生活費などはどうなるのか。

こんなことは小学生が考える問題ではないが、美子には考える必要のある問題だ。

さあ、どうする。

「ちなみに、生活費くらいは持つてるから」

この男、読心術でも心得ているのだろうか。
愉快そうに笑う彼を私はひと睨み、そして彼には敵わないと諦める。

「諦めが早いね」

険しく目を細めて、彼は立ちあがった。

「すべて話せれば君は大空へ飛びあがれるのに」

両手を広げて、私を見下ろした。

その彼の目が一瞬だけ、ネクタイと同じ赤に見えたのは気のせいだろうか。

「おやすみー」

間延びした声。

風呂上り、正確にはシャワー上がりの彼は私に一声かけて階段を上がる。

そして私はいつものように外に出る。

今日は遅くなってしまった。

ここからいちばん近い公園は、工事中のようだ。学校に行くときにシヨベルカーやらなんやらが並んでいた。

居場所はある筈だ　嘘を吐いたくらいでは

失われるようなものじゃない

それでも失った　私はなんて愚かだろう

歌を謡って、私は橋の上。

前に見つけた歌。作曲者は私と同じなのだろうか。

精一杯強がっているのに、とても脆い存在が、自分だと、わかっている。

「ああ、そういえば」

後ろを車が通り過ぎ、そのあとに思い出す。

「ピエロの所に行ってなかったよ」

好きな時にいつでもおいで、とピエロは言った。

私は帰り道にピエロの家に通った。

ああ、アリスの一件からか。

彼と会っていない。なぜだろうか、前はあんなにも、懐かしかったのに。

16 五月前の晴天に赤い傘

早く冬が来てほしい。

そんな風に思えるほど、朝から暑い焼けそうな日差しだった。まだゴールデンウィークも過ぎていない、ある月曜日だというのに。

私はゆっくりと歩いて学校へ向かう。

早歩きでいきたいところだが、そうすれば学校に着く頃には汗だくだろう。

「……疲れた」

切にそう思いながら、口に出す。笑えるほど弱々しいその声は、自分のものだ。

「あはっ、来たよ」

笑うのならあなたが自分を笑えばいいじゃない。

私が教室に入ると、いつも私をあざ笑ったように見てくる女、皆骸友里恵ナガイユリエが言った。彼女の一声で、ざわついていた教室がひとつになる。

思い思いの言葉を口にしていたクラスメイトは、私を話題にして笑っている。

けれどもそんなことは気にせずに、私は前のドアからスタスタと自分の机に歩いていく。

「おはようございまーす」

なんとも緊張感のない。

軽く睨みつけると、たった今教室に足を踏み入れた星稜第一小学校六年二組担任は、軽く身を引いた。

やはり、先ほどの嘲笑が渦巻いていたこの教室は、柔らかな雰囲気

気だ。私だけが取り残されている。

そしてチャームが鳴り、日直が、寝癖のついた髪を押さえながら、朝の会の司会を始める。

「先生の話です」

「はいっ」

日直の男子が言って、担任はパタパタと教壇に上った。馬鹿みに子供らしく。否、実際に馬鹿だ。

「……先生、今日ちょっとバカなことをしちゃいましたよ」
しん、となつて話を聞く。

ほら、やっぱり馬鹿だ。自覚症状がある。

私は思ったことを口には出さずに聞いていた。顔には出ていたけれど。

「こんなに晴れているのに、傘、持ってきてませんでした」

へへっ、と笑う彼女。それにつられたのか、教室がある種の笑いに包まれる。いや、つられたふりをしているだけだろうけれど。

そしてもちろん、ある種というのはふわりとした笑い。

あの皆骸友里恵も、社長令嬢らしい、仕込まれたように上品な笑みを浮かべていた。

と、周りを観察していて私は何かに引っかかっていることに気がついた。

何か、聞いたことある話のようだった。

既視感という言葉があるが、これは既聴感とも言つべきなのだろうか。

どこか記憶の片隅で、何かがざわついている。

けれども、既視感というのはその場で作られる幻想、だったと思う。夢か、現実か。

確かめるために数分前からの出来事を、何度も思い描く。

「あ……」

小さく息を呑み、私は驚きを声に出さずにはいらなかった。もちろん、出すのは蚊の鳴くように小さな声だったが。

気づいてしまった。けれどもあのときのピエロは、冗談のように言っていた、か。いや、本気で言っていたかもしれない。

『その先生さんは、この先苦労するよ。たとえば、車に撥ねられて傘が足に刺さるとか』

彼のその言葉は、何だったんだろうか。

17 その目的と成功に完敗

「美子、買い物に連れて行ってやるよ」

家に帰ると、もう蓮がいた。いつもの制服ではなく、ラフな格好をしていた。黒いロゴTシャツ、パーカー、Gパン。ジャラジャラと装飾品をつけているのは彼の趣味だ。

いつものようにランドセルを黒いソファに置き、白いほうのソファに座っている彼は、言ったのだった。買い物に連れて行ってやると。

「……買い物って何？」

食料品なら私が行くけれど。そういう風に言うと、蓮は肩を竦めた。

「美子、いつも同じ服じゃん。それに地味。僕だけが買いに行くとサイズが合わなくなるから、美子も」

この男、洞察力が高い。私は感心しつつ、けれども毎日見ていればわかるか、などと思っていた。

そして気づくと目線が下に下がっている。私は床を見ていた視線を上げ、目の前の蓮を見る。

「ね、行こう。お金は僕が払うから大丈夫」

彼は財布を出して、軽く振った。そして私の腕をつかむ。

結局連れ出されてしまった。駅まで三十分ほど歩き、切符を二枚買って彼は私に一方を手渡した。

「ほら、ついてきて」

当たり前のように自動改札を通った蓮を、私はぎこちなく追う。

視線が痛い。特に化粧の濃い女性から。高校生然り、会社員然り。居心地が悪い。

「どこいくの」

私は彼の左隣について、問いかける。

「もうちよつと都会なところ」

「……なんで」

「美子が、さみしそうだから」

この男、わからない。どこまでわかって言っているのだろうか。理解不能だ。

そして私たちは五番ホームに着いた。ほぼ同時に電車が来る。

「人嫌い」

ぼそつと私は呟く。これから乗るであろう電車の中には人があふれていた。

さすがに酒臭い頭のさみしい人は乗っていないようだが、代わりに学生が多い。

「十分ほどは我慢、そしたら着く」

右にいた彼は私の手を掴んだ。

「はぐれるなよ」

予想通り、車内は人だらけだった。皆同じような服を着た学生たち。

なぜそんなに高い声を出す、なぜそんなに臭い匂いを身に纏う、なぜそんなに作り笑顔を浮かべる？

私はそんな女たちを見て、なぜか憐れむような感情を覚えた。

「さ、着いたよ」

駅の改札を抜けて、階段を下りていくと都会だった。

本当の、首都圏あたりの人からすれば都会ではないかもしれないような、そんなところ。

「で、あの店のが美子に似合いそうなんだけど」

彼が指したのは少し奥の、“WALTZ”という店だった。ウインドウには白や黒、灰やベージュなど、落ち着いた色が並んでいる。

あんなのは似合わないだろう、なんて。

私はここまで連れてこられたことを軽く後悔し、けれどもスタスタと歩く蓮を追いかける。

「いらっしやませー」

「あの、この子に似合うような服を見てあげて欲しいんですけど……」

WALLTZに入ると、三拍子の音楽が流れていた。店名に合わせているのだろう。

そして、声をかけてきた店員に蓮は声をかけ、私を指す。

「はい、では、こちらへ」

私は店員に連れられて、奥へと歩く。

見まわすと、私が着ても釣り合わないような服ばかり。この店員も、よく面倒なことを引き受けてくれたものだ。

「……こちらなどは如何でしょう？」

店員が右手に持っていたのは黒地に赤や白、紫やピンクといったいろいろな色の糸で刺繍が施されたワンピースだった。下のほうがフリルになっている。丈も私の膝より少し下。

そして、左手には短い丈の、ベスト、と言うのだろうか。白いものを持っていた。

「おっ、いいじゃん」

後を付いてきていた蓮が言う。そして、レジで会計を済ませている。

私はこれを学校に着て行ったらどうなるかを考えた。

その時だった。

ブレーキ音、そして鈍い音。

私は軽く背伸びをして、その音がした方向を見た。

「……！」

悲鳴、怒声、なんだろう。

車に撥ねられ、倒れていたのは女の人。それも、私がよく知る担任教諭。

足に赤い傘が突き刺さっていた。そこからおびただしい量の血が流れる。

歩道が赤く染まる。

「美子、こっち向いてて」

彼は言って、私を引く。

「こんにちは、彼女を受け取りに来ました」

無邪気な色を含んだ、少女の声。

蓮が、きついくらいに私の手を握った。

18 悪魔が見せる悪夢のような悪戯か

ガラスの向こうで赤の惨劇が繰り返されているであろうと私は予測して、ここは、ショップの店内。

「……あの、何か用ですか……？」

私の手を握り締めた蓮が言った。怯えているようだ。

店員が私に袋を渡した、その時の状態で入口のほうを見ていた。私にはレジのカウンターと、驚愕の表情を浮かべる店員しか見えない。

ただずつと、ゆつたりとした三拍子の音楽が流れる。

「……ねえ」

むつとした声が聞こえる。声の調子からして、私と同じかそれより下か、ぐらいの年齢だろう。

「ねえ、こつち向いてよ美子ちゃん」

コツコツと質のいい床が鳴る。その音はだんだんと私のほうにつかづいてきて、すぐ近くで泊まった。

私自身で感知できなくなるほど握られた手とは反対の手を持たれた。そして、その手を引かれる。

「ねえ、この子は私のって知らないの？」

大きな瞳をパッチリと開いて、私の目の前に来た少女は左側に立つ蓮を見上げた。

少し癖のある黒髪に、茶色っぽい瞳。典型的な、私の近くにいる人種だ。

言っていることは、そんな人種の言うことではないが。

「ねえ、梟フクロウ

」

「キヤーっ！」

「嫌っ！ 来るなっ！」

「っ！」

緊迫した店内に、悲鳴が聞こえてきた。

この状況を作り出した本人も、悲鳴に興味を持ったか視線を外へと向ける。

さつきまで私たちの接客をしていた店員も悲鳴を上げた。幸い今この店にいる客は私と蓮と、客なのは知らないが少女だけ。相手が子供なので、少し気が緩んでいたのだろうか。何人もの泣き声がある。

「美子、やっぱり見ちゃだめだ」

私は皆の視線の先を追って、そして途中で目がふさがれる。

「う、わ……」

けれど一歩遅かった。見てしまったのだ。

瞬間的に記憶された世界は、なんと悲惨なことか。

石畳に広がる赤い血液、倒れる人影、赤い傘。ここまでは先ほどのままだ。

けれど、全身を焼かれたような人

もはや人とは呼べるの

かわからないような“肉の塊”がそこにあった。立っていた。右手に割れたビール瓶を、左手に血まみれのカッターナイフを。

その足元には腹を押さえて苦しんでいる人が何人も。一人か二人は、首を切られて死んでいたかもしれない。

外は混乱。

取り残された店内に、緊張が走る。

「……あーあ、面倒くさい」

少女は言った。心底あきれているようだ。

そして、今更になって自己紹介を始める。

「私は五年の藤道瑠璃^{とつとうるり}。じゃあね、美子ちゃん」

店内の緊張が解ける。私の両目を覆っていた手がどけられる。

あの少女、藤道瑠璃は去っていた。相変わらず外は惨劇だ。

19 切れないナイフで人を切り刻むそれは快樂

WALTZの店内、相変わらずピアノの音がスピーカーから流れ出る。

外の惨劇に感情が麻痺してしまったのか、私はそれを見つめている。ただそれだけだ。

「美子、本当に大丈夫？」

心配そうな顔をして、藤野蓮は私に問いかける。そういう彼のほうが、青白い顔をしているように思うのは、肌の色が抜けるように白いせいなのか。

そして、外には怒声が飛び交っていた。

先ほど出て行った、藤道瑠璃という少女に声をかける警官、それを面倒そうに見上げる彼女。そして、血溜りに立っているのは焼けた人間。

焼けた人影を取り囲む防護壁に、大人の警官は身を隠し、焦げた人間を恐れている。

「ろっ！ 早く！」

窓のせいで上手く聞き取れはしないが、ここから早く逃げると歩く人々に言っているようだ。そしてそれを叫んでいた警官はこの店の中にいる人の存在に気づき、驚愕の表情を浮かべた。

「君達！ 早く逃げなさい！」

蓮がそういわれたのに気づき、ふと一歩、私を連れて前に進んだ。

風が切られた。

私のいた場所の空気が二つに切られた。というのはもちろん目で見てわかるものではなかったが、私の背後の空気が揺らいだことに変わりはない。

「……何？ 殺したいの、死にたいの、どっち？」

恐ろしいほどの殺気を放って蓮は言った。私の後ろにいた、殺意を持った者がたじろいだ気がする。

ふい、と殺気が消えれば、蓮は普通の高校生だ。

「何か用ですか、藤道瑞貴先輩」
みずき

振り返ると、奥のほうから出てきたであろう姿をした男がいた。バイトだろうか。そして、蓮が先輩と呼んだ。

彼は短めに切られた髪を掻き上げた。

「あれ、今、瑠璃来てなかった？」

先ほどの少女を知っている、瑞貴という男。

苗字が同じなので兄妹だろうか。

そう考えているうちに、蓮は私の手をつかんで一步下がらせる。

「藤道さん、お願いした仕事は全部終わったの？」

「……早いわあ」

WALLTZの店内が、一瞬オフィスでのいがみ合いのような雰囲気包まれた。おそらく唯一の男性店員は、何かしら忌み嫌われているようだ。

「……まったく、オーナーがいるときは猫かぶってるくせにね」

あきれたように瑞貴が言うと、店員たちは顔を歪めた。

瑞貴はクス、と笑い、右手に握っていたペーパーナイフに視線を落とす。

「……美子、出ようか。ここで勝つのは先輩のほうだから」

私にだけ聞こえるような声で蓮が言った。そして、店内を去る。

去り際に、「その顔、歪んでるから作り変えてあげましょうか」

という男の声がしたのを、蓮は気にするそぶりもなく進む。

「君達、大丈夫だったか？」

先程の警官が訊いてきた。隣で蓮は猫をかぶって「大丈夫でした。ありがとうございます」と、爽やかな笑顔で言っている。

私と一緒にいるときは、ピエロのような笑いしかしないのに。

20 レクイエムなど誰が唄おう

翌日学校に行くと、大騒ぎだった。

やはりというか、なんというか。昨日の出来事が原因で。

その場にいたのを目撃されていた私は、案の定職員室に呼び出された。そこから隣の応接室へ。入るとソファに警官がいるのがわかった。まだ若い。三十代だろうか。その向かいに私は座った。教頭も左に座る。

タイミングを見計らって、教頭が言う。

「柚月さん、昨日見たことを警察の人に話してください」

担任は死んだらしい。あれだけの血が出ていれば、至極当たり前のことなのだけれど、私は彼女が死んだという自覚がなかった。

「さ、話してもらえるかい？」

笑っていない。顔は笑っているけれど雰囲気や、心など。けれど、笑っていない警官に話をしなければ。

「……高校生の藤野蓮が私をあそこまで連れて行ったんです。そして、WALLZの店に入ったとたんに外で事故が起きた。それから、焼かれた肉塊が人を瓶とカッターで切ったり刺したりして。で、私の後ろで殺し合いが始まったらいいですね。見てませんでしたか」
ふんふんと訊いていた警官が、私が間をおくと、手帳に向けていた顔を上げる。

「あとは我々が知っているのと同じですか」

「はい」

子ども扱いされているのかいないのか。警官は子供をあやすときのような、困ったような顔をしていた。

「では、その藤野蓮という男はどこに？」

「高校生だと言ったと思うんですが。今は学校に行ってる時間じゃないんですか？」

私がそう言っていると警官はとても困ったような顔をした。息を吞んで、

彼は私に言った。

「その藤野は、一ヶ月ほど前から学校には行っていないみたいなんだよ」

先ほど連絡してもいなかったと、警官は続ける。

「連絡手段を彼は持たないものだから、困ったもんです」

「へえ、アイツ……シメてやろう」

私は笑って、警官の続きの言葉を待つ。

「では、同僚の方のお話を伺ってもよろしいでしょうか？」

「はい」

教頭に促されて応接室を職員室を経由しない出口から出る。いちいち職員室へ入るなど面倒だ。

パタパタと廊下を歩き、階段を上って六年二組へ入ると、今日は騒々しいままだった。けれども、視線は集中する。

「アイツが先生を見殺しにしたんだ」

「アイツが化け物を呼んだんだ」

どうでもいい話だが、そのとき私の心はとても穏やかだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8836d/>

ピエロ

2010年12月10日15時52分発行